



第 1 日

国 語

(9 : 3 0 ~ 1 0 : 2 0)

注 意

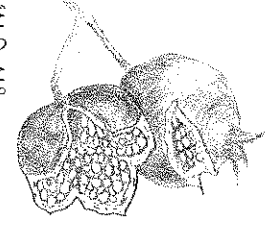
- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから13ページに、問題が一から四まであります。
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第 番
------	-----

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一夜の^①木枯らしにざくろの葉は散りつくした。その葉は、ざくろの木の下の土を円く残して、そのまわりに落ちていた。

雨戸をあけたきみ子は、ざくろの木が裸になったのにも驚いたが、葉がきれいな円を描いて落ちていたのにも不思議だった。風に散り乱れそうなものだった。



ざくろの実

梢^{こずえ}にみごとな果実があった。

「おかあさん、ざくろの実。」と、きみ子は母を呼んだ。「ほんとうに……。忘れていた。」と、母はちよつと見ただけで、また台所へもどって行った。

忘れていたという言葉から、きみ子は自分達のさびしさを思い出した。縁先¹になつてゐるざくろの実も忘れて暮らしているのだった。

半月ばかり前のこと——いとこの子供が遊びに来ると、早速ざくろに目をつけた。七歳の男の子が我武者に木を登るのに、きみ子は生き生きしたものを感²じて、「まだ上に大きいのがあるわよう。」と、縁から言った。「うん、だつて、取ったら、僕おられないよう。」なるほど、両手にざくろを持っては、木からおりられない。きみ子は笑い出した。子供が非常に可愛^{かわい}かった。

子供が来るまで、この家ではざくろの実を忘れていた。それからまた今朝まで、ざくろの実を忘れていた。

「んこそ……。」と、きみ子が言った時は、もう啓吉はきみ子に横を向けて、母にあいさつをしていた。

啓吉が出て行つてからも、きみ子がちよつと庭の木戸の方を見送つてゐると、「啓ちゃんもあわてものだねえ。勿体^{もったい}ない、こんなおいしいざくろを……。」と、母は言った。縁側に胸をあてて手を伸ばすと、ざくろを拾った。

さつき啓吉は、眼の色があたたくなくなりかけた時、自分で気づかず手を動かして、ざくろを二つに割ろうとしたはずみに、取り落としたのだったろう。割れ切らないで、実の方をうつ伏せに落ちていた。

母はそのざくろを台所で洗つて来て、「きみ子。」と差し出した。「いやよ、きたない。」顔をしかめて、身をひいたが、ぱつと頬が熱くなる。きみ子はまごついて、素直^②に受け取った。

上の方の粒々を少し啓吉が蓄^{かき}つたらしかつた。母がそこにいるので、きみ子は食べないと尚^{なほ}変^なりだつた。なにげない風に歯をあてた。ざくろの酸味が歯にしみた。それが腹の底にしみるような悲³しいよろこびを、きみ子は感じた。

そんなきみ子に母は、一向無頓着^③で、もう立ち上がつていた。鏡台の前を通つて、「おやおや、大変な頭。こんな頭で、啓ちゃんを見送つて、悪かつたわね。」と、そこに坐^{すわ}つた。

^A きみ子はじつと櫛^{くし}の音を聞いていた。「お父さんが、なくなった当座はねえ。」と、母はゆつくり言った。「髪を梳^かくのが、こわくつて……。髪を梳いてると、つい、ぼんやりしちゃうのね。ふつと、やっぱりお父

子供の来た時は、まだ葉のあいだにかくれていたが、今朝はざくろの実が空にあらわれていた。このざくろの実も、落葉に円くかこまれた庭土も、凜^{りん}と強くて、きみ子は庭に出ると、竹竿^{たけざお}でざくろの実を取った。熟し切つていた。盛り上がる実の力で張り裂けるように割れていた。縁に置くと、粒々が日に光り、日の光は粒々を透き通つた。

きみ子はざくろにすまなかつたように思った。

二階に上つて、さつきと縫物²をしてゐると、十時頃、啓吉の声が聞こえた。木戸があいていたか、いきなり庭の方へ廻^{まわ}つたらしく、気負い立つた早口だつた。「きみ子、きみ子、啓ちゃんが来たよ。」と、母が大声に呼んだ。あわてて糸の抜けた針をきみ子は針山に刺した。

「きみ子もね、啓ちゃんが出征する前に、一度会いたいつて言い言いでたんだけど、こちらからはちよつと行きにくいし、啓ちゃんもなかなか来てくれないしね。まあまあ今日は……。」と、母が言っている。昼飯でもと引きとめるが、啓吉は急ぐらしい。「困つたわねえ。……これうちのざくろ、おあがり。」そうしてまたきみ子を呼んだ。

きみ子がおりて行くと、啓吉は眼^めで迎えるように、その眼は待ち切れぬように、きみ子を見ているので、きみ子は足がすくんだ。

啓吉の眼にふとあたたかきものが浮かびかかった時、「あつ。」と、啓吉はざくろを落とした。

二人は顔を見合せて微笑した。微笑し合つたことに気がつく、きみ子は頬が熱くなった。啓吉も急に縁側から腰をあげて、「きみちゃんも、体に気をつけてね。」啓吉さ

さんが、梳き終わるのを待つてらつしやるような、そんな気がしてね、はつとしたりすることがあつてね。」

母がよく父の残しものを食べていたのを、きみ子は思い出した。きみ子はせつない気持ちがかみあげて来た。泣きそうな幸福であつた。母はただ勿体ないと思つただけで、今もただそれだけのことで、ざくろをきみ子にくれたのだから。母はそういう暮らしをして来たので、つい習わしが出たのだから。きみ子は、秘密のよろこびに触れた自分が、母に恥ずかしかつた。

しかし、啓吉に知られないで、心いっぱいの別れ方をしたように思い、また、いつまでも啓吉を待つていられそうに思うのだった。

そつと母の方を見ると、鏡台を隔てる障子にも、日がさしていた。膝に持つたざくろに歯をあてることなど、もうきみ子には恐ろしいようだつた。

(川端康成「ざくろ」による。)

(注) ざくろ 植物の名。果実は熟すと裂け、粒状の中身が露出する。

縁 和風建築で部屋の外側に付けた板張り

の床の部分。縁側ともいう。

我武者 勢い任せに激しい行動をすること。

凜 ぎりぎり引き締まっているさま。

出征 軍隊の一員として戦地に行くこと。

縁側の図

1 ①③の漢字の読みを書きなさい。

2 縁先になつているさくろの実も忘れて暮らしているのだったとあるが、これはきみ子たちのどのような暮らしを表現していますか。次のア～エの中から最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

- ア 満ち足りた暮らし イ 華やかな暮らし
- ウ 活気のない暮らし エ 気ままな暮らし

3 いきなり庭の方へ廻つたらしく、氣負い立った早口だったとあるが、啓吉がこのような様子にしてみ子の家を訪れたのはなぜですか。その理由について述べた次の文の空欄Iにあてはまる適切な表現を、十五字以内で書きなさい。

出征する前に、(I) と思つていたので。

- ア 啓吉の残したさくろがおいしかったこと
- イ 啓吉と言葉を交わすことができたこと
- ウ 啓吉に自分の気持ちを伝えられたこと
- エ 啓吉に触れることができた気がしたこと

5 次の文は、段落A以降の展開について述べたものです。空欄V・VIにあてはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

母の発言を聞いたきみ子は、母がよく父の残しものを食べていたということを感じ出し、そこから (V) に (VI) を重ね、様々な思いを抱くに至っている。

- ア (V) 自分と母 VI さくろと櫛
- イ (V) 母とさくろ VI 自分と櫛
- ウ (V) 母と父 VI 自分と啓吉
- エ (V) 自分と父 VI 啓吉と母

4 悲しいよろこびとあるが、この描写について、国語の時間に生徒が次のような話合いをしました。空欄II・IVにあてはまる適切な表現を、空欄IIは十字以内、空欄IVは二十字以内で書きなさい。また、空欄IIIにあてはまる最も適切な表現を、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

山田… 私は「悲しいよろこび」という描写がよく分らなかったんだけど、これはきみ子のどんな気持ちを表しているのかな。

青木… よろこびでありつつも、同時に悲しいものでもあるというような複雑な気持ちなんだろうね。どんなことに対して、悲しいと感じたり、よろこびを感じたりしているんだろう。

西川… 啓吉の残したさくろに園をあてたことから感じている気持ちだから、啓吉に関係があることじゃないかな。

青木… きみ子は啓吉に好意を寄せているんだよね。だから……。

山田… ちょっと待って。きみ子が啓吉に好意を寄せているというのはどこから分かるの？

西川… それは、啓吉と微笑し合ったときや、母親から啓吉の残したさくろを差し出されたときに (II) ことから分かるよ。

山田… なるほど。好意を寄せている啓吉に関わるよろこびや悲しみと考えると、(III) に対するよろこびでありつつも、同時に (IV) に対する悲しい気持ちでもあるんだね。

問題は、次のページに続きます。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

演劇は古くから存在する芸術様式であるが、その性格は複雑であって、小説のような文芸とは^①コトなる伝達のしかたをしている。

演劇は、だれがこしらえたのか、作者というものが、見る側、享受者にとってはつきりしていないのである。a、作者の意図するところがなまの形ではつきり感知されることはないといってよい。近代の個人的劇作家はつよい自己主張をすることがすくなくないけれども、それでもなお、小説家のように、直接、作者の声を伝えることはできない。

芝居として演じられるには、脚本だけでは足りないのはつきりしている。演出が加わる。それによって台本には当然、解釈が加わるから、原作者の意図、作意が多少とも変化することを免れるのは難しい。

さらに、演者が参加して、その演ずるところによってはじめて、具体的な舞台になる。どのように、原作者の意図に忠実であろうとしても、また、いかに演出家の考えに合致しようとしても、演ずるのは、演者の個性による表現であるのをやめることができない。

そうして演じられた芝居を見る観客は、まためいめいに自分なりの色づけ、まとめをしながら鑑賞する。演劇的表現のbは、こうして何層もの解釈が加わり、いわば加工の施された世界を理解するところから生ずる。

そういう多様な改変の要素をきらうところから、レーゼドラマ、つまり、演劇化の過程を抜かして、脚本をそのまま小説のように読むジャンル

ルが生まれる。これなら、演出、演技という仲介の要素を排除して、読者はじかに作者の書いたものに触れることができる。作者の言わんとするところを尊重する近代において、また、作者がいちじるしい個性をもっていることと認定される場合において、実際の舞台よりも書齋における読書の方が豊かな享受になるという認識がよまるところでレーゼドラマへの志向はつよくなる。

作者の個性の表出をそのまま理解しようという文学伝達の意識が高まるにつれて、演劇は、それがつくり上げられる過程を通じてもつ複雑な総合性のゆえに、芸術的価値を^②ゲンする傾向にあると言ってよい。小説の栄える時代に演劇が不振であるという文学史の状況は、ひとつには、演劇の総合性によって誘発されるものである。

A 正統的な演劇は、しかし、総合性をもって無署名的である。だれが書いた作品であるか、観客には、作者名によってしか知ることができない。作者の書いたものが、そのままでは舞台にならないことがあれば、作者とは別の手による脚色という大幅な加工が必要になる。そしてすべての場合において、演出家によって作品に新しいものが加わり、ある部分はとりのぞかれる。役者は、セリフのことはそのまま口にしても、演技によってそのニュアンスに微妙に改変を加えないではいられない。そういう過程を通じて、原作者の作意はきわめて多くの改変を受けることになるが、それを嫌っては演劇は成立しないのだから仕方もない。

B 演劇は作者の主観、思想、意図をそのまま伝える様式ではない。多くの参加者、観客をふくめて、作者、演出家、演者がすべて、めいめいの

意図、解釈を集約してつくり上げる芸術である。近代文学の作者にとって、不純な世界で、複雑でありすぎる。しかし、それによってのみ表現できるおもしろさがあることは、現代においても忘れられているわけではない。

文学の伝達として考えるとき、こういう演劇様式の性格はもつとも原初的な形をとどめているということもできる。つまり、作者の考えそのまま作品を完結させるのではなく、¹享受者に解釈の自由が大きく許容されている、ということである。作者は、作品の成否を、舞台を成立させる関係者に委ねるのである。普通、そのことを作者も観客もはつきり意識していないだけのことである。

(外山滋比古 「古典論」による。)

(注) ジャンル Ⅱ 文学作品の種類。

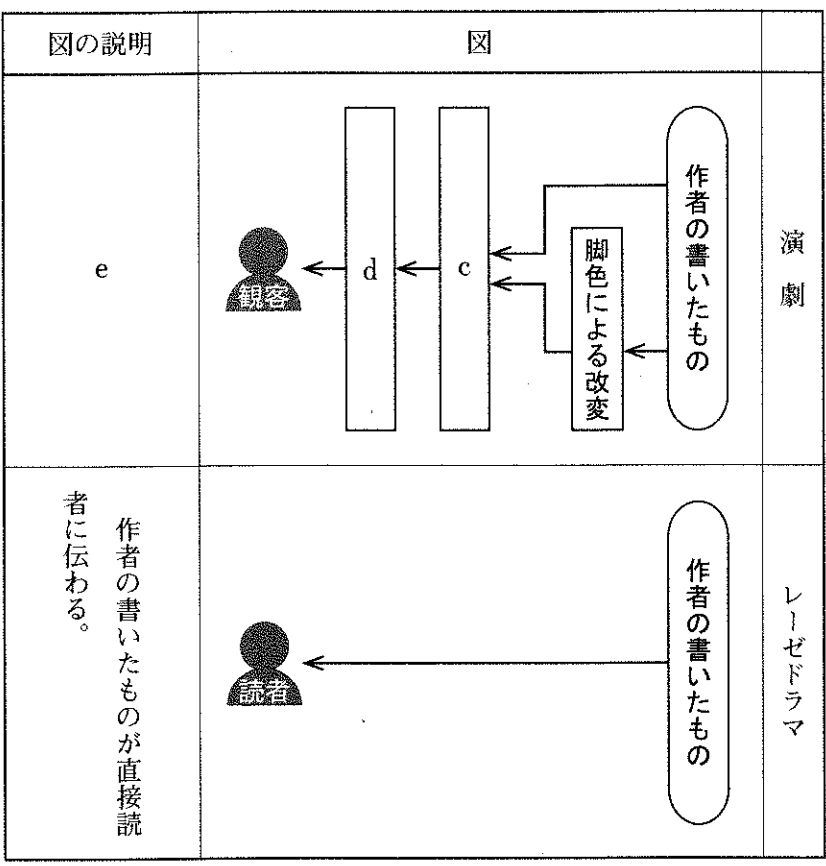
ニュアンス Ⅱ ことばの裏にある意味合いや話し手の意図。

1 ①・②のカタカナにあたる漢字を書きなさい。

2 a にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。
ア ところで イ したがって ウ しかし エ なぜなら

3 b にあてはまる最も適切な語を、段落 **A**・**B** の中から五字で抜き出して書きなさい。

4 この文章において、筆者は、文学における「作者の書いたもの」の伝達の過程について、演劇とレーゼドラマを対比して述べています。次の表は、それぞれの過程について、筆者の主張を踏まえ、図とその説明によってまとめたものです。この表中のc・dにあてはまる適切な表現を書いて演劇の図を完成させなさい。また、この表の空欄 **e** にはまる適切な表現を、二十五字以内で書きなさい。



1 享受者に解釈の自由が大きく許容されているとあるが、これについて、生徒が思ったことを話し合いました。次の【生徒の会話】はそのときのもので、あとの【田中さんが読んだ文章】は、【生徒の会話】の中で田中さんが話題にした本の該当部分です。空欄Ⅰにあてはまる適切な表現を、「……ので、……ということ」という形式によつて、四十五字以内で書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる適切な表現を、十五字以内で書きなさい。

【生徒の会話】

山本…「享受者に解釈の自由が大きく許容されている」と筆者は述べているけれど、これはどういうことかな。小説でも自由に解釈することはできると思うんだけど。

田中…確かにね。僕は演出に興味をもっていたので、それに関係する本を読んでみたんだよ。それによると、演劇の脚本の場合、小説と違って（Ⅰ）（Ⅱ）というように、（Ⅰ）に、せりふも、俳優がその言葉を（Ⅱ）ということ想像しながら読んでみると、いろいろな読み方ができるんだって。

山本…なるほど、そういうことだったんだ。僕も脚本を自分なりに想像しながら読んでみようかな。

【田中さんが読んだ文章】

小説は状況から風景まで全部こと細かに地の文で説明してあります。戯曲には、小説のような地の文はなく、「ト書き」と呼ばれる動きやそのときの状況を説明する文章がせりふの合間などにごく簡潔に挟まれています。この形式が読みにくいという人がいますが、私は逆にとても面白く感じています。それは、想像力の隙間が、小説よりはるかに多いからです。

さらに、せりふという話し言葉が大きな位置を占めていることも小説以上に読み手の想像力をかきたてます。せりふを声としてどう立ち上げていくか、書かれている膨大な言葉が、俳優によつてさまざまに音声化されることを心において読み進めることで、読み方が限りなく広がっていくのです。

（栗山民也「演出家の仕事」による。）

（注）地の文Ⅱ 会話以外の説明や描写の文。
戯曲Ⅱ 演劇の脚本。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

鶯の身を逆さまに初音かな 其角
鶯の岩にすがりて初音かな 素行

去来曰く「角が句は、暮春の乱鶯なり。初鶯に身を逆さまにする曲なり」
其角の句 映春の暖かさに乗じて飛び回る鶯 初春の頃の鶯 技

1 【初】の字心得がたし。行が句は鳴鶯の姿にあらず。岩にすがる理解できない 素行の句 鳴いている鶯

は、あるいは物におそはれて飛びかかりたる姿、あるいは餌えさひろふえさ動物 飛びついた

時、またはここよりかしこへ飛びうつらんと、伝ひ道にしたるさまなり。あちら 飛び移ろう

凡そ、物を作するに、本性を知るべし。知らざる時は、珍物新詞に魂物を句に詠むときは 本来の性質 物の珍しさや言葉の新しいさ

を奪はれて、外の事になれり。魂を奪はるるは、その物に著する故なり。執着する

3 里。これを 本意を失ふといふ。角が巧者すら、時にとつて過ちあり。其角のような熟練した人である

初学の人、慎むべし。用心すべきである

（「去来抄」による。）

（注）初音Ⅱ その年に初めて聞く鳥などの鳴き声。

其角Ⅱ 江戸時代の俳人。芭蕉の門人。
素行Ⅱ 江戸時代の俳人。去来の門人。
去来Ⅱ 江戸時代の俳人。芭蕉の門人。

1 【初】の字心得がたしとあるが、去来が其角の句についてこのように述べた理由として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 逆さまの姿は初音が聞こえる頃の鶯の姿とはいえないから。
 - イ 逆さまの姿では鶯の初音の趣深さが損なわれてしまうから。
 - ウ 鶯が身を逆さまにするのは初めてとは限らないから。
 - エ 鶯の初音は春の終わり頃にならないと聞けないから。
- 2 ひろふを、現代かなづかいで書きなさい。

3 本意を失ふとあるが、このことについて、国語の時間に生徒が班で話し合ったことを次のようにまとめました。空欄Ⅰ・Ⅱにあてはまる適切な表現を、空欄Ⅰは十五字以内、空欄Ⅱは十字以内で、それぞれ現代の言葉で書きなさい。

去来によれば、「本意を失ふ」とは、句を詠むときに、（Ⅰ）
（Ⅱ）に心を奪われて、その物がもつ本来の性質から外れた内容を詠んでしまうことだという。
例えば素行の句の場合、鶯が岩にすがる姿は、本来（Ⅱ）ではないのに、「初音かな」と詠んでしまったところが「本意を失ふ」ことになっているといえる。

四 青空中学校の図書委員会では、四月に発行する「図書だより」に、

新一年生に向けた文章を載せることになりました。次の【生徒の会話】は、その文章の内容をどのようなものにするかについて、図書委員会で話し合ったときのものです。また、【資料1】は、【生徒の会話】の中で早川さんが提示したものです。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【生徒の会話】

委員長… 皆さん、今日は四月に発行する「図書だより」に載せる文章の具体的な内容について話し合いたいと思います。新一年生に読んでもらうのにふさわしい内容にしたいと思うのですが、何かよい考えはありませんか。

早川… 私は、小学生と中学生の読書の実態についての比較から、載せる内容を考えられないかと思い、参考になりそうな資料を調べて持ってきました。

【資料1】を見てください。これは「学校読書調査」の結果の一部で、調査対象の1か月間に1冊も本を読まなかった児童・生徒の割合である「不読率」の推移を示したものです。

委員長… 早川さん、ありがとうございます。では、皆さん、早川さんが持ってきた【資料1】から考えてみましょう。

高木… わあ、二十年間で中学生の不読率は随分下がっているん

ですね。

早川… そうだね。以前先生から伺った話では、平成十三年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布され、その頃から全国的に読書活動が進められてきたそうよ。だから、不読率が下がったのだと思うわ。

高木… そうだったんですね。でも、ここ数年の不読率はあまり変わっていないなあ。

小林… そうだね。それに、小学生と比べて中学生の不読率が高いという傾向も続いているね。

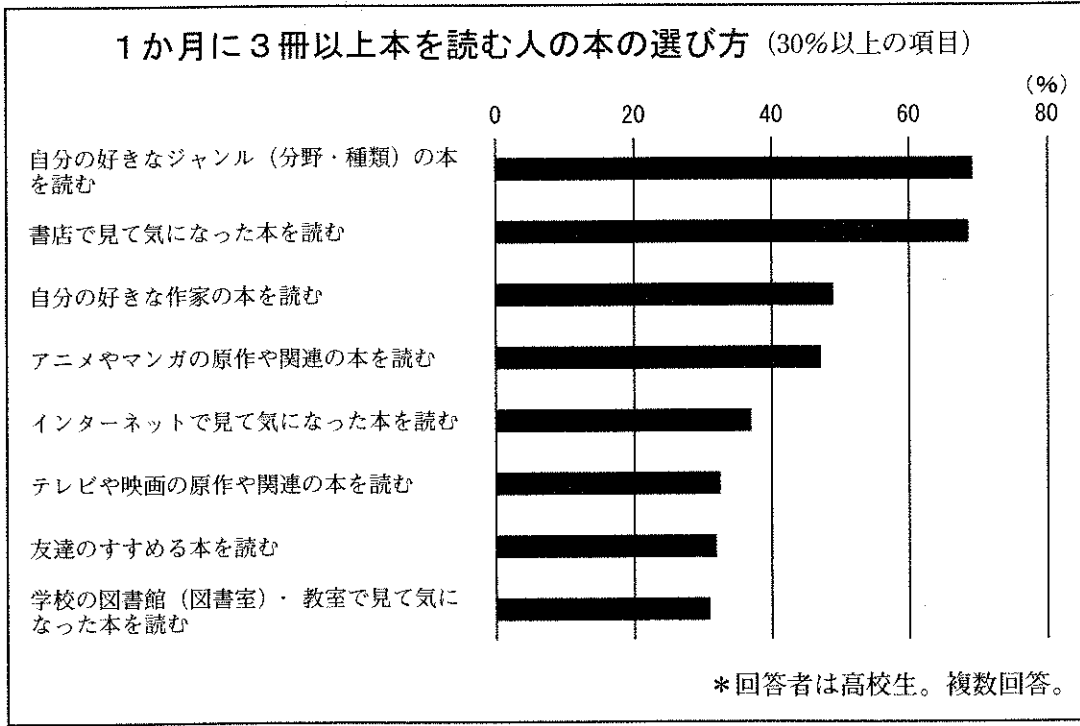
安田… 小学生の頃は本を読んでも、中学生になると本を読まなくなってしまう人もいるんだね。残念だなあ。

高木… そうだ。中学生になっても読書をするように呼びかける文章を載せたらどうでしょうか。

木村… 確かにいい考えだと思うけど、それだけでは足りないと思うよ。中学生になると、本を読まない人が増えてしまうのだから、なぜ読まないのかという理由も把握して、読書をするにつながるような助言をしたらどうかな。

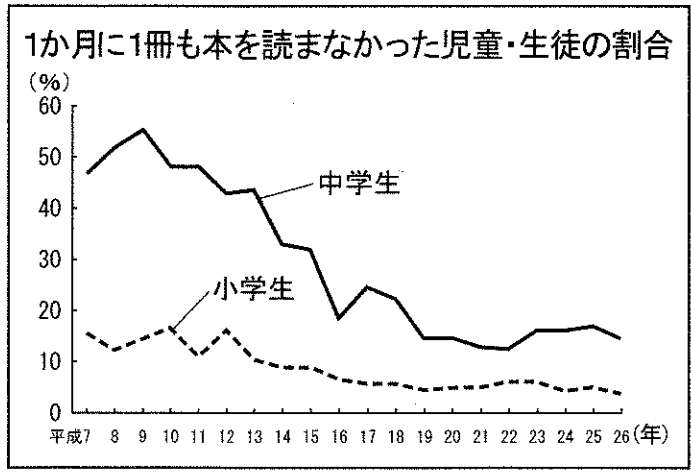
委員長… なるほど。読書と呼びかけるだけでなく、本を読むようにするためのアドバイスをすることですね。そうすると、もっと資料が要りそうですね。

では、みんなで資料を集めて、新一年生に読書を勧める文章を書いてみましょう。



(平成26年度文部科学省委託調査 「高校生の読書に関する意識等調査報告書」による。)

【資料4】



(全国学校図書館協議会ウェブサイトによる。)

【資料1】

1 【生徒の会話】中の
 の話合いの中で果たしている役割として最も適切なものを、次のア
 エの中から選び、その記号を書きなさい。
 ア それまでの話合いの内容を要約する役割。
 イ それまでの話合いの論点を整理する役割。
 ウ 直前の発言を分かりやすい表現で言い換える役割。
 エ 話合いの目的や流れを踏まえた案を提示する役割。

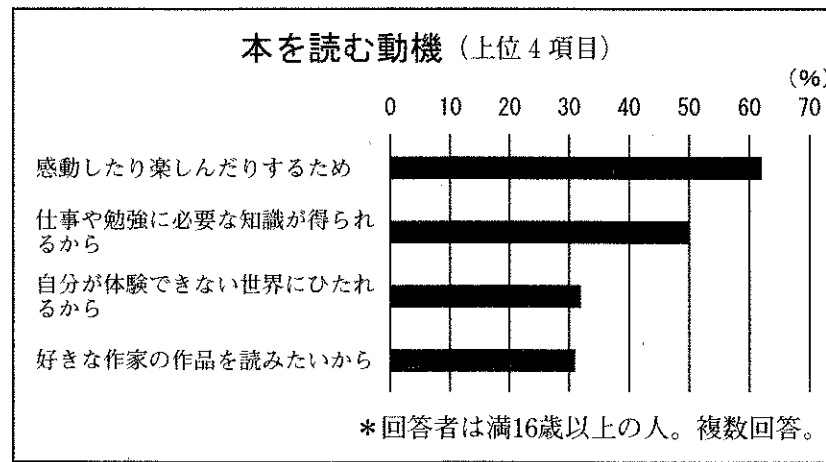
で囲まれた部分の発言が、こ

読書をしない理由 (上位2項目)

A	本を読まなくても不便はない	58.2%
B	読みたい本がない・よい本が分からない	44.8%

*回答者は中学生。複数回答。

(出版文化産業振興財団 「現代人の読書実態調査」2009年による。)



(毎日新聞東京本社広告局 「読書世論調査2015年版」による。)

【資料2】

2 図書委員会では、この委員会での話合いを踏まえ、次の【資料2】
 【資料4】を集め、それらに基づいて新一年生に読書を勧める文章
 を考えて書くことになりました。あなたならどのように書きますか。あ
 との条件1〜3に従って書きなさい。

【資料3】

条件1 【資料2】の「読書をしない理由」のA・Bのうち、どちらか一つの理由を取り上げ、本を読むようにするためのアドバイスを書くこと。
 条件2 【資料3】【資料4】のどちらかまたは両方の資料の内容を踏まえて書くこと。
 条件3 解答用紙の書き出しの文章に続くように書き、内容に応じて段落を変え、二百字以内で書くこと。ただし、解答用紙の書き出しの文章は字数に含まないものとする。

